

山口県阿武町における 2015 年介護保険制度改正後の高齢者福祉施設の取り組みと利用実態  
- 「いらお苑」を対象として -

地域福祉  
利用実態

整備運営  
地域包括ケアシステム

空間構成

正会員 ○尤 琨琦\*  
正会員 三島 幸子\*\*  
正会員 山本 幸子\*\*\*  
正会員 細田 智久\*\*\*\*

## 1. 研究背景・目的

2015 年の介護保険制度改正により、地域の特性に応じた多様で柔軟な高齢者福祉サービスが提供される「地域包括ケアシステム」の構築が進められ、各制度に応じた施設運営が求められる。

先行研究では、同一運営主体により広域基幹施設と小規模施設を組み合わせた施設整備を進める先進的な事例である山口県阿武町を対象に通所介護施設<sup>1)</sup>と廃校活用型の入所施設を含める複合型施設<sup>2)</sup>の運営形態と利用特性の特徴を分析した研究成果がある。

本研究では阿武町において、2015 年の介護保険制度改正後の取り組みを整理した上で、新設された複合型高齢者福祉施設「いらお苑」を対象とし、空間構成と利用実態の特徴を明らかにすることを目的とし、地域包括ケアシステムの構築の一環としての有効性を検証する。

## 2. 調査方法

調査は第一に「いらお苑」の施設概要及び開設経緯に関するヒアリング調査と施設平面の実測調査を実施した。第二に施設の使われ方と利用者属性のアンケート調査を実施した。調査時期は 2019 年 6 月-2020 年 2 月である。

## 3. 「いらお苑」の開設経緯と空間構成

### 3.1 施設の整備プロセスと「いらお苑」の開設経緯

介護保険制度制定を契機に、2000 年前に阿武町の奈古地区に特別養護老人ホーム等が併設した複合型の通所介護施設「清ヶ浜」が開設され、運営法人が設立された。2006 年以降、全 3 地区に民家を活用した小規模通所介護施設「えんがわ」、「田中さん家」、「ひだまり」が相次いで開設され、施設間で連携体制が構築された。その後も宇田郷地区においては廃校を活用した施設への移設等連携体制の変化が見られた。福賀地区については、民家を改修した小規模型のデイサービスセンター「えんがわ」

(表 1) が整備されていたものの手狭な状況であった。また、山間部の豪雪地域でありながらデイサービス以外の他のサービスがないまま、在宅生活の余儀なくされている状況にあり、地域住民からも福祉施設の整備が強く要望されたところ、当地の縫製工場を建て替え、2018 年には小規模多機能型居宅介護、グループホーム、生活支援ハウスや介護予防拠点を含めた複合型施設「いらお苑」(表 1) が開設された。これを契機に小規模型のデイサービス

表 1 「えんがわ」、「いらお苑」の施設概要

施設名	えんがわ	いらお苑		生活支援ハウス	グループホーム	介護予防拠点
サービス	デイサービス	小規模多機能型居宅介護				
サービス内容	ディサービス	ショートステイ	訪問介護			介護予防教室 コミュニティカフェ
面積(㎡)	283.5	172.3		109.8	210.9	119.9
定員数	10	10	5	3	7	30
登録者数	24	18	4	2	3	7
一日平均利用者数	8	10	1	-	7	17
職員数	5	2+兼務 7 名		兼務 7 名	4+兼務 7 名	2 名

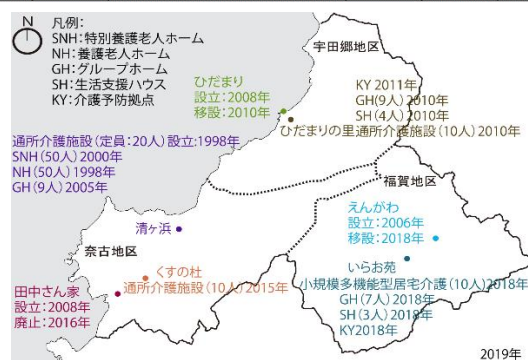


図 1 阿武町高齢者福祉施設配置図

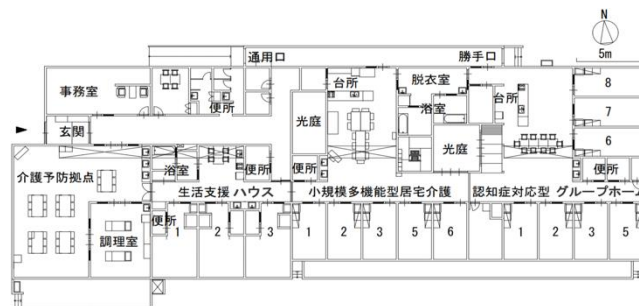


図 2 「いらお苑」の平面図



図 3 外観 図 4 小規模多機能型居宅介護 図 5 グループホーム

センター「えんがわ」が複合型施設「いらお苑」に移行した。「いらお苑」は福賀地区の高齢者福祉の拠点としての役割を担い、阿武町の全地区で高齢者福祉の拠点が確保された(図 1)。

3.2 施設の空間構成

「いらお苑」は木造平屋で、玄関側から介護予防拠点、生活支援ハウス、小規模多機能型居宅介護、グループホームが配置され、1本の廊下で自由に行き来が可能である(図2、3)。居室は南東に位置し、採光を確保している。小規模多機能型居宅介護は(図4)、居室を生活の中心となり、ソファ、テーブルが配置されている。居室の横に畳コーナーも設けており、一部の利用者の午睡の場として使われる。グループホームは(図5)、入居者が集まる居間を囲むように個室が配置しており、一緒に生活する人をより身近に感じることができる。

4. 各部門の利用実態

4.1 小規模多機能型居宅介護

小規模多機能型居宅介護部門では、通い(定員10名)、宿泊(定員5名)や訪問介護を組み合わせたサービスを提供し、地区住民の在宅生活を支援している。登録者は18名で、通いの平均は10名である。利用者属性は(図6)、全員が福賀地区の居住者で、女性が約8割を占めており、年齢は80代が多い。要介護1-2の利用者が6割、要支援1-2も約3割と介護度の低い利用者が大半を占めているが、8割以上の利用者が入浴サービスを受けている。また、利用回数の制限がないため、週3回以上の利用者が7割以上を占める。また、従来のデイサービスを提供しない宿泊サービスの利用者が約3割を占めている。

4.2 グループホーム

「いらお苑」開設以前は福賀地区に入居施設が整備されていなかったため、他地区の入居施設を利用していた。グループホーム部門は定員7名で、開設後すぐに満床になり、入居者は全員が福賀地区の居住者であり、福賀地区の需要をカバーしている(図7)。性別は全員が女性で、年齢は80代が約9割を占め多く、介護度は要介護1-2が8割を超え多い。

4.3 生活支援ハウス

生活支援ハウス部門は定員3名で、2019年8月までに3名の利用があった(表2)。利用理由は、冬季等の在宅生活への不安や夫の入院が挙げられ、利用期間は3日の短期から3ヶ月の長期利用と様々である。

4.4 介護予防拠点

介護予防教室は定員30名で、専属職員が2名で担当しており、毎週火曜日に行われる。内容は全身体操、健康相談、手作り活動が中心であり、平均17名が利用している。また、地域住民が自由に立ち寄れる「コミュニティカフェ」は週2回開催され、地域住民の交流や高齢者福祉拠点

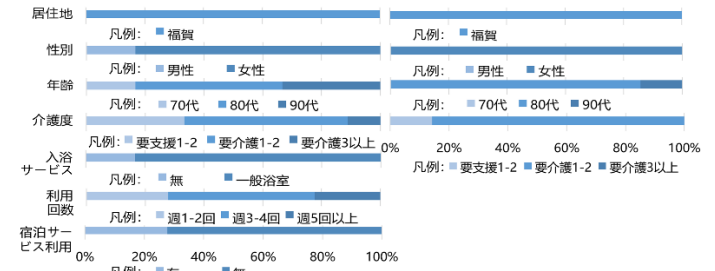


図6 小規模多機能型居宅介護

図7 グループホーム

表2 生活支援ハウスの利用者属性

表3 介護予防拠点の活動内容

	A	B	C		介護予防教室	コミュニティカフェ
居住地	福賀	福賀	福賀	開催する曜日	毎週火曜日	毎週水、金曜日 (毎月1回イベント開催)
性別	女性	女性	男性	時間	13:30-15:30	9:30-16:00
年齢	74	91	90	活動内容	健康チェック、 全身体操、健康 相談、季節に応 じた作品作り、 カラオケ等	利用料金は1回100 円で、コーヒーやお茶 のおかわりは自由 (イベント開催時、手 作りデザートも用意)
家族構成	夫婦のみ	単身	単身			
利用開始時期	H30.12.21	H30.12.20	H31.4.15			
利用期間	1ヶ月	3ヶ月	3日			
利用理由	夫の入院	冬季一時入居	健康状態により、在宅生活が困難			

として機能している(表3)。

5. まとめ

- 2018年には福賀地区の住民の要望をきっかけに入居施設が併設した複合型施設「いらお苑」が開設された。地域包括ケアシステムの構築に向け、介護予防、生活支援ハウス、小規模多機能型居宅介護やグループホーム等多様なサービスが設けられ、自立から在宅での生活が困難な高齢者まで幅広い高齢者の福祉需要に対応している。施設の空間構成については、視覚的に連続するように、可動式間仕切りドアを活用し、各部門を連続に配置しており、利用者間の協力と交流が図られる。
- 小規模多機能型居宅介護部門は、介護度の低い利用者が多い一方、利用回数が週3回以上の割合が高く、宿泊も利用され始めている。グループホーム部門は、開設後満床になり、要介護1-2の入居者が多い。また、介護予防教室も平均17名が利用する等、新規利用者の増加がうかがえる。また、「いらお苑」の利用者は全員福賀地区内からである。

以上より、「いらお苑」は福賀地区の福祉需要をカバーしており、地域特性に応じて柔軟なサービスが提供され、地域に根差した地域型福祉施設としての整備効果が大きいと考えられる。

参考文献

- 中国真人・三島幸子・山本幸子: 広域基幹施設と民家を活用した小規模通所介護施設の整備プロセスと利用特性, 日本建築学会計画系論文集, 第77巻 第675号, pp. 1169-1177, 2012.5
- 三島幸子・中国真人・山本幸子・孔相権: 農山漁村地域における廃校を活用した複合型高齢者福祉施設の使われ方

\*筑波大学システム情報工学研究群 修士課程

\*\*島根大学学術研究院環境システム系 助教・博士(工学)

\*\*\*筑波大学システム情報系 准教授・博士(工学)

\*\*\*\*島根大学学術研究院環境システム系 教授・博士(工学)

\* Master's Course, Graduate School of Systems and information Eng., Tsukuba Univ.

\*\* Assistant Prof., Institute of Environmental Systems Science, Shimane Univ., Dr.Eng.

\*\*\* Associate Prof., Faculty of Eng., Info. and Systems, Tsukuba Univ., Dr.Eng.

\*\*\*\* Professor, Institute of Environmental Systems Science, Shimane Univ., Dr.Eng.